

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム
派遣研究報告書

平成 23 年 6 月 10 日

派遣者氏名（専門分野）	鷺田 睦朗	（ 共和政期ローマ史 ）
-------------	-------	--------------

下記のとおり報告します。

記

研究テーマ	ローマ共和政後期における政治環境 ——共和政後期～帝政初期におけるマルスの野における政治参加状況の変貌を中心に
-------	--

派遣期間

平成 23 年 2 月 9 日 ～平成 23 年 4 月 11 日

訪問研究機関	国	都市	訪問機関	受入研究者
	イタリア	ローマ	ローマ大学	P.Carafa 教授
	イタリア	ローマ	ドイツ考古学研究所	

派遣先で実施した研究内容

今回の派遣においては、「ローマ共和政後期における政治環境」というテーマにもとづいて研究を進めた。具体的には、共和政後期から帝政初期にかけてのマルスの野の土地利用の変遷を中心に研究した。ここではローマを支配する公職者が毎年選出されており、ローマ市中央のフォルム・ロマヌムと並んで政治的に重要な地域である。この地域を対象として、「民主政論」以降の近年の研究状況において活発になっている地勢的研究を行った。このようなスタイルの研究はフォルム・ロマヌムを対象としてはいくつか見るべき成果が上がっているが、マルスの野を対象とした研究は存在していない。その理由として考えられるのは、地勢的研究を行う上で不可欠な考古史料・研究の問題である。今回の調査の予備段階として、まず、共和政後期に公職選挙が実施されていたマルスの野に関して、選挙民会に用いられたフリースペースについては考古史料状況が乏しいために、これまで実証的な研究を行うことが困難となっていることを確認した。この状況を打破するために、ローマ大学の P.カラーファ教授の指導の下、同大学内で Sistema Informativo Archeologico を利用して、フリースペースの面積を算出した。少なくとも見積もった場合でも、フォルム・ロマヌムの 10 倍以上のフリースペースがマルスの野に存在していたことを検証した。この面積は 10 万人以上の市民が一度に投票できる程のものであり、「寡頭政」的と見なされるローマ共和政像に対する重要な反証となるものである。

続いて、この地域の土地利用の変遷について研究を進めた。前 55 年のポンペイウス劇場建築以降、沼沢地であったマルスの野北西部は皇帝家等の有力者により埋め立てられて、多くの公共建築物が建設されており、これが政治的に利用される一方で、選挙に用いられていたフリースペースにもサエプタ・ユリアという投票場が建設され、共和政の政治空間が大きく変質したことを確認した。この問題については、マルスの野について Sistema Informativo Archeologico のデータ集積を行っている M.T.ダレーシオ教授と意見交換する機会を得た。沼沢地の埋め立てについては、これまで日本で述べられていない知見であり、重要なポイントとなる。

埋め立てに基づく土地の獲得が無主物先取に基づいて行われていたこととも、政治的観点からの地勢的研究についての新しい知見となるように思われる。

また、両教授と意見交換するための資料調査を目的として、ドイツ考古学研究所で渉猟を進めた。その際、近年の考古学の成果の一端として、ローマ郊外北東、ティベル川左岸が早期にローマ化した地域であり、この地域と都市ローマとの関係性の深さを確認した。その一端を示すものとして、近年発掘された「Villa dell'Auditorium」を実見して、その歴史的重要性・史料的独自性を確認した。

その他、ローマの政治環境に関わる研究文献を収集した。特に、イタリアやスペインで開催された研究会議の成果報告をもとにした文献など、日本では存在すら知りたがたい研究文献を手に入れたことは非常に有益であった。

研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

- ① 共和政後期に公職選挙が実施されていたマルスの野に関して、フリースペースについては考古史料状況が乏しいことを確認した上で、その面積を少なく見積もった場合でも、ローマ市中心部で政治空間として機能していたフォルム・ロマヌムの10倍以上の空間が利用できたことをローマ大学の **Sistema Informativo Archeologico** を用いて検証した。
- ② マルスの野の北西部に存在していた沼沢地がポンペイウス以降、アウグストゥス期まで公共建築物を建てるために漸次的に埋め立てられて、無主物先取に基づいて獲得されていたことの重要性を確認し、この変遷について、ローマ大学の **Sistema Informativo Archeologico** に基づいて、現在ダレーシオ教授が作成している地図データ（今夏に完成の予定）の利用の許諾を得た。
- ③ ドイツ考古学研究所で渉猟を進めて、ローマ郊外北東、ティベル川左岸が早期にローマ化した地域であり、この地域と都市ローマとの関係性の深さを確認した。
- ④ 近年発掘された「Villa dell'Auditorium」を実見して、その歴史的重要性・史料的独自性を確認した。
- ⑤ ①-④に関する二次文献と情報を収集し、その他、ローマの政治環境に関わる研究文献を収集した。

派遣後の研究発表の予定

現在、③と④を基にした研究発表を7月に属州研究会、12月に九州大学史学会で発表を行うことが決定しており、その成果を『パブリック・ヒストリー』誌に投稿する予定である。また、①と②を組み合わせた論文を欧語雑誌に投稿するべく準備を進めている。これらの成果を、最終的には2012年度に大阪大学に博士号を申請するために執筆する著作の一部に組み込む予定である。